

その九 熊本

社長の具合が悪くなってから守モリの俺に対する態度に違和感を抱くようになった。神戸のコンサートまではそんな感覚を持ったことはなかった。違和感、それは友情を通り越した異常な親切心？ のようなもの。

「コンサートの写真集の儲けを受け取ってくれ」

正式にモリ・P R・コーポレーション内に別動部が開設されて一年が経った。別動部の活動が会社のイメージ向上に貢献したが、守モリのために働くのが生きがいだから金に執着心はなかった。中学までは単なる同級生だったが、定時制高校に入学してからは彼の両親にも世話になったので恩返しも含めて必死に働いた。

鳥来ウライで撮影した写真がフランスを筆頭にヨーロッパ諸国から高い評価を得た。撮影者名は公表しなかった。守モリに報告しようにもほとんど出社しない。出社しても話をする時間がないので俺は陰謀を企てた。問い合わせがあれば撮影者を「守モリ」とする事を総務に進言した。もちろんすぐさま承認された。しばらくするとマスコミ各社は守モリを新進気鋭の写真家として賞賛したが、幸いな事に出社しないから取材を避ける事ができた。

高い評価を受けたのは台湾出身モデルの表現力や現地スタッフのサポート力、それに鳥来ウライの

神秘性に着目し予算を青天井に設定した守の的確な指図が会ったからだ。守の顔を立てる事ができて非常にうれしかった。

さて守（モリ）は会社の業務を停滞させるわけにはいかないと出社の回数を徐々に増やした。にわかには身辺が騒がしくなる。

俺はと言えば、大学も新学期が始まり桜が散った今ごろは、履修届を出す時期なので手持ち無沙汰。熊本にレストランを新規オープンする広告の仕事ぐらいしかなく暇にしていた。ところがだ。守と一緒に出張すると言う。一緒にと言っても俺は一足先に熊本に赴き露払いした。

*

守と熊本市内の新築ビルの最上階のレストランにいる。このレストランは万博で勢いを得た大阪のホテル会社の九州進出の足がかりになるので力が入っている。しかし、モリ・PRにとって極ありふれた案件で、先に打合せと撮影をしておいたから後はチェックする程度で終わる。契約金額も大したことはない。社長の体調から考えても敢えて飛行機を使った遠方出張する案件ではない。あるとすればこの会社との取引が古いからだろう。

午後一時過ぎだが、中年の支配人に連れられてウエイトレスが練習を兼ねた豪華ディナーを次々とテーブルに置く。支配人が守に尋ねる。

「ビールでもいいかですか？」

守は会釈してやんわりと断った。今迄こんな対応はなかった。試食はもちろん試飲も仕事の

うち。乾杯はしないが、瓶ビールなら注ぎ具合、生ビールなら泡の厚さが広告写真のイメージとズレがないか確かめる。場合によっては撮り直す事もある。

更に今までと違ってたのは出された料理の確認。つまり「見栄え」のチェック。広告の写真とかけ離れていると問題になる。しかし、守は無口で食べるだけだった。だから食事時間は短かった。俺が確認の写真を撮ろうとすると制する。

——おかし

ウエイトレスがコーヒーをテーブルに置くと食器を片付け始める。守は思い出したように支配人を呼ぶようウエイトレスに告げる。ウエイトレスは食器を乗せた台車を押して姿を消す。すぐ支配人がやって来る。

「何か、至らないことがありましたでしょうか」

まず支配人に着席を促す。押しつけにならないように目線の高さを揃えるためだ。

「食事が終わったかどうか尋ねてから食器を片付けるようにして下さい。食後の飲み物はリクエストを確認してから出すようにされたほうがいいと思います」

「分かりました」

敢えてウエイトレスの前でアドバイスしなかった。この辺の流れは守ならではの配慮だ。

「その外については申し分ありません」

しかし、守の対応はモリ・P Rの仕事ではない。コンサルト屋さんの仕事だ。俺たちは客で

はない。今回は本来すべき確認作業をせずに余計なサービスをしただけ。とにかくチグハグだった。

「今しばらく打ち合わせをしますのでテーブルをお借りします」

これもおかしなお願いだ。何もここで打ち合わせする必要はない。

支配人が一礼して立ち去ると守は砂糖を入れずにミルクだけ注ぐ。一瞬口元がピクツと動くがスプーンでかき混ぜる。

「どうした？ 何かあったんか？」

たまらず聞いた。それほど奇妙な空気が流れていた。

——社長の体調が悪いのに何故出張したのか

守はスプーンをおいてカップを口元に運ぶとほんの少し口を含む。しかも視線を合わせようとはしない。しばらくすると聞き取りにくい声を出す。

「そろそろ、身を固めようと……」

すぐさま反応する。相手は決まっている。

「春夜とか」

当然「うん」という言葉を待つ。しかし、返事はない。俺の脳裏には優雅にバイオリンを弾く春夜の姿が浮かぶ。ところが、不思議な事に春夜の顔が知秋に変わる。

*

一週間ほど前、偶然にも大学の事務室で知秋と出会った。

「久しぶり」

返事はなく終始無言だった。退学届が見える。ぶっちゃけた話、俺を慕って神大に入学した彼女を突き放した結果が目の前にあった。ショックを受けたが原因は俺にある。しかも与えた苦痛に比べれば大したことはない。

去年の今頃、一緒に新潟方面を旅行した。そして夏休み前に、友達として付き合いたいと突っばねてからは、よそよそしい感じだったけど交際は続いていた。遠回しに気持ちを伝えたが、どれほど苦しめたことか……俺は想像することからも逃げた。

届け出の理由欄に「結婚」という文字があった。

*

「……とにかく、めでたいことや」

俺は半ば放心状態の守^{キリ}に心のこもらない言葉を贈る。

「まだ、決まったわけやない」

再び啞然^{アゼ}とする。社長の体調を考慮すれば式の日を決めるのがむずかしいのかも知れない。

「式の日か？」

守^{キリ}はうつむいて答えない。しばらくしてから重大な言葉を軽く置く。

「相手が……」

俺は周りをはばからず半ば叫ぶ。

「どういうことや！」

「うーん。社長の事、考えると……」

——まさか春夜が、うんと言わなかった？

あり得ない事だから黙ってしまふ。やがて守はポツリと口を開く。

「西海さんと結婚するんか？」

はぐらされたと思つたが、何とか守の発信周波数を探る。

「知秋のことか？」

『『トンネルの中の駅』の取材で一緒に旅行した子や』

会社に出張旅費を請求したとき富山での宿泊費の領収書に「二名様」と記載されていたので守に少しばかりの説明をしたことを思い出す。もちろん、一人分の宿泊費しか精算していない。

「結婚するらしい」

「えっ！ お宅ではなく？」

黙って頷く。

「お宅を慕って神大に入学した子やないか！」

急に守の声が強くなる。少しばかりか調子に乗って詳しく知秋の事を話してたのかも知れない。

「二人で旅行までして、なんでや！」

「いい子やった」

「てつきりその子と結婚すると……」

「甲斐性なしの俺はまだ子供や。お前と違う」

守はしばらく黙る。そして何かを思い出したように声を出す。

「東山さんとは？ 京都でデートした後、どうなった？ 付き合いは続いてるんか」

この話題変更は何を言いたいのか分からなくなった。

「振られてはないけど……どうなんやろ……」

俺にとつてどうでもいい事だから、いい加減に言葉を濁してから話をスタート地点に戻す。

「それより、おまえや」

守が身構える。

「相手は春夜やろ？」

再確認する。守は視線を外す。間を置いてから応える。

「春夜……じゃない」

「えっ！」

春夜は守の幼馴染で許嫁。しかも守バンドのバイオリン担当でいつも一緒に練習していた。世の中、一寸したことが流れを簡単に変えてしまうんやな。それでいてなかなか掴みがたい

……」

不意を突いたように出た言葉。しかも、守キリらしくない言い回し。

「一寸した事」、この言葉が偶然を意味するのなら、偶然なんか掴つかみがたいどころか、掴つかむ事はできない。いったい何を言いたい！

守キリは春夜以外に何人もの女子と付き合あいがある。しかし、結婚相手となると春夜以外に思いあたる相手はいない。「春夜でない」と聞いた以上黙もるしかない。

「社長は……」

「もう、手遅れ。進行を遅らせる手術はした……逆に体力が……」

俺は社長が結婚相手を春夜以外になる事に同意しているのかを聞きたかったが……。

「そうか……」

*

ここから熊本市内が見渡せる。もちろん目の前には熊本城がそびえ立つ。城には大きく分けて二種類ある。黒い城と白い城。松本城や岡山城にこの熊本城は黒い城。白い城の代表格は姫路城。名古屋城や彦根城も白い城だ。ただ姫路城は太平洋戦争中は黒い城だった。俺は黒い城が好きだが、さすがに黒い姫路城は敬遠する。

熊本城から少し離れたところに水前寺公園スエゼンがある。この公園はよく岡山城の後楽園と比較されるが、どちらも黒い城の影響を受けている。しかし、水前寺公園は城から離れている分、独

自の美しさを持つている。それは「水前」という名が示すとおり堀の水ではなく豊富な地下水が公園を支えているから。

後樂園は岡山城、と言っても本丸はなく堀が残っているだけだが、角々しい岡山城の石垣が後樂園のふくよかな優しさを殺している。その辺を考慮して天守が再建されたら後樂園は生まれ変わるかも知れない。

もうコーヒーは冷めていた。支配人に促されたのかウエイトレスが近寄ってくる。

「入れ替えましょうか。それとも……」

「ありがとう。もう、ここを出ますので」

ウエイトレスが立ち去るのを待ってから、守はしつこく美英子の話に戻す。

「東山さんのこと、どう思っている？」

「まあ、好きやけど」

「付き合ひ、続いているんやろ？」

「お前に車、借りて京都へ行ったんが最後や」

「かなり前か……でも彼女は自宅に気がある」

「なんで、そう思うんや」

——上町から情報か？

少し首を傾けて守を見つめる。すると信じられないような言葉が出てくる。

その九 熊本

「本当は心底好きなんやろ？」

何故かあつさりと頷く。

「押して押して押しまくるべきや」

「もういい。暖簾に腕押しや。押したら、こけるだけや」

昆布巻きをくわえた美英子の顔を浮かべながら我慢していた言葉を思い切つて声にする。

「なんで、熊本まで来てそんな話するんや」

話していて守モリの心の根底を推察できないが、俺に関係がある事を喋るつもりでいたのは確かだ。関係のない悩みなら、もっと以前に打ち明けるだろうし、こんなところまで来てする話ではない。

もう一度、春夜のことを尋ねようと思つたが三度目になるのでやめた。守モリが立ち上がる。

「会社に戻る。後は頼む」

俺はなにも言わずに後ろ姿を見つめる。ついに烏来ウライの話は出なかった。いつ切り出すかと身構えていたが拍子抜けした。

ここから、熊本城の天守がよく見える。しかし、堀は見えない。ましてや水前寺公園はまったく見えない。

この案件、断られた。